

という、私たちが人間である限り抱き続ける問いに私たち自身の答えを見出すためのヒントが隠されていると考えています。

シルクロードに魅せられて

—海外調査の現場より—

田中 裕子

シルクロードと聞くと、何をイメージするだろうか？列を成して旅するラクダの隊商、或いはそれを幻想的に描いた平山郁夫の絵画だろうか。正倉院の御物、敦煌の石窟群、バーミヤンの巨大な仏像なども有名であろう。沙漠、寺院、廢墟の遺跡、いろいろ挙げられる。そうした中で、私は特にユーラシア大陸北部を通じた草原世界に興味を持っている。

二〇〇四年八月。モンゴル国の西北部にあるオランオースグI遺跡の発掘調査隊に参加した。日本とモンゴル国との共同調査隊で、一九九九年以降当遺跡での調査を

続けている。首都のウランバートルから約六〇〇キロ、遺跡のある丘陵眼下には、なだらかに起伏する緑色の大草原が一面に広がり、巨大な石の墳丘が点々と連なる。小石堆がその周りを囲み、シカ紋様の立石が列をなす。抜けるような青空の下調査を進めていると、彼方には地響きを立てながら通り過ぎていく馬群があり、近くではゆっくりと草を食むヒツジの群れがいる。本や写真でしか知らない広大な世界があった。

この遺跡は、ヘレクスルと呼ばれる大型の積石塚と、シカの絵が刻まれた鹿石という記念碑が同時に存在する、紀元前一千年紀前半の遺跡である。

オランオースグI遺跡に並ぶ鹿石は、同様の石造物が中国の西北地域やロシアの南シベリアなどでも見つかっている。同じ時代の青銅短剣や刀子、さまざまな装飾品においても、形態や装飾の類似が数カ国をまたいでみられる。こうした資料は、現在の国境線を越え、今から二〇〇〇年近く昔、草原を舞台に人や情報が行き来した様子を

ありありと伝えてくれる。草原世界の広さとダイナミックな人々の活動を現代に伝える生の資料なのだ。

草原地帯から出土する青銅器や鉄器の装飾に興味を持ち、現地を訪れ調査に加わり、遺跡をめぐる環境に魅せられるようになった。調べれば調べるほど、遺物や遺跡の背景に見えてくる人々の交流の広さと速さに感心してしまう。私自身がシルクロードの考古学に関わりを持ったのは、比較的遅く考古学専修に進んで二年目であった。しかしそれ以来、飽きることなく、さめることなく興味を抱き続けている。草原世界の広がりや独自の文化は、常に世界中の関心を集めるものなのだろう。実際昨年、トルファンで開かれたシンポジウムには二十一カ国からの出席者があった。

シルクロード研究は、中央ユーラシア考古学の一部であるといえ、ボーダレスな文化交流が主要な研究テーマである。そのため、習得するべき言語も多く、対象とする国も多い。各国家間での調査や研究の密度

や方法、関心の主題も様々である。また、二十世紀初頭に日本を含め欧米諸国が探検隊を送りこんだ場所でもあり、出土遺物のコレクションは世界中に収蔵されている。

私は二〇〇七年から一年半ほど中国に留学し、語学の習得と研究者との交流、さらに現地での資料調査に明け暮れていた。初期鉄器をめぐる交流が研究テーマであり、青銅器時代から初期鉄器時代の武器や工具を中心に各地の博物館や考古研究所でたくさん資料を見せていただいた。しかし、見れば見るほど、調べれば調べるほど、草原世界への興味は尽きない。そして中国との関連のある資料は、中国の外にある場合も多い。言語はまだまだ習得途中のものが多々あり、論文を読むのに非常に時間がかかったりもする。海外がフィールドなので渡航費など必要であり、学部時代はアルバイト三昧だったりした。困難な部分も多いがそれでも、研究を続け、何度も遺跡を訪れたいと思うモチベーションは全く落ちる気配がない。

歴史を研究する目的は様々であろう。私の場合、草原世界を訪れ、出土した遺物を見ることにより、その土地に惹かれ、その文化に魅せられ「なぜ」と「もっと広く、深く知りたい」と思うようになった。モノに基づき、モノから歴史を考えるとという考古学の方法論も私自身の興味を引き出すのに合致していたともいえる。しかし、単純で明快な興味が続いているのは、ユーラシア草原世界が備える人々のダイナミックな交流の歴史であり、その東端に位置する日本もまた、間接的ではあるにせよ、その渦の一部であったという認識からであるといえる。

〈第二回〉

早稲田で歴史を学ぶこと

真辺 将之

もともと政治経済学部で経済学を専攻していた私が歴史学を学ぶきっかけになった

のは、鹿野政直先生の『鳥島は入っているか』との出会いであった。経済学にそれなりの面白さを感じながらも、そこに何か腑に落ちないものを感じていた私にとって、どんな小さな存在でもそれを無視したくないというこの本のメッセージは衝撃であった。全体的効率性を重んじる経済学という学問にある種の「冷たさ」を感じていた私は、そこから鹿野先生の本を貪り読むようになり、そこからしだいに歴史学の世界へと引き込まれていった。

社会科学は全般に全体を支配する法則Ⅱ理論を重んじる。とりわけ経済学は全体の効率をいかにして高めるかということを重視する。その結果、極論すれば、九九九人が幸せになるならば、一人が犠牲になってもやむをえないと言わんばかりの冷たさをも垣間見ることになる。それに対して、鹿野先生の研究は、その犠牲にされる「一人」の立場に徹底してこだわっているように私には感じられた。当時は明確に意識していたわけではないけれども、のちに大学院に